

博物館都市巡り②

バルセロナ（カタルーニャ、スペイン）

高橋 哲雄

二つの「中世」を抱える町

バルセロナは地中海の古くからの海港である。

スペイン第二の都市というよりは、西地中海の繁華な交易都市といった開かれたイメージが、この街にはつきまとう。そのことは、二度も万国博覧会の開催地となったことにもあらわれている。一回目（一八八八年）は世界の都市で七番目（ヨーロッパではロンドン、パリ、ウィーンに次ぐ）。二回目は一九二九年で、それまで複数回開かれた都市はロンドン、パリ、フィラデルフィアしかなかった*。

*ただし、「万国博覧会」は条約や国際組織の裏付けのない概念で、主な国際博覧会というほどの意味であるから、何回目といっても厳格なものではない。

オリンピックもここでは二度開かれた。一九九二年のそれは有森裕子の力走でおなじみだが、一九三六年の大会は、ナチス・ドイツの

「民族の祭典」となった同年のベルリン・オリンピックに対抗して開催された「人民オリンピック」で、公式のものではない。

オリンピックの誘致をベルリンと競って敗れた一因が、マドリッドとの競合にあったことにも示されるように、スペインといっても、バルセロナのあるカタルーニャは、マドリッドのある内陸高燥のカステイーリャとは異質の精神風土の地で、とかくそりが合わない。いまはフランス領になっているルーション地方との方がはるかに一体感がつよい。フランコ政府を嫌って終生スペインに帰国しなかったカタルーニャ出身の大チェリスト、パブロ・カザルスはピレネー北麓の村ブラドに住みついたが、言葉にも習慣にも困らなかったといわれる。一九七九年、カタルーニャが自治州となり、バルセロナがその首都となったのは、歴史を知る者にはごく自然な成りゆきにみえよう。

この街を今回選んだのはほかでもない。前回にみた大きな「博物館都市」の要件であるいくつかの時代にまたがる重層的な都市構成をとっているだけでなく、博物館の社会的役割について考えさせられる大きな問題提起をあえて形にした都市だからでもある。

手短かに言おう。バルセロナには、それぞれに見ごたえのある中世都市の街区と近代都市の街区があるが、それに加えてカタルーニャ美術館という巨大な中世美術館がある。美術館の収蔵品の最大の眼目はカタルーニャの山中に散在中世初期（ロマネスク）の教会群の壁や天井に描かれたフレスコ画であり、美術館はそれらを壁体から剥ぎとるといふ異常な手段——ほとんど文明への蛮行——でその本来の場所から切り離し集中保存することによって生まれたのである。

つまり、この街の中世は「残された中世」部分と「(周辺部から)切り取られた中世」部分とから成る、という言い方もできよう。そして、さらにそれにガウディやピカソを生み育んだ「近代」の部分を重ね合わせるなら、地中海都市であるとともに、スペインの中でも異質の、ほとんど独立した「ネイション」といえるほどの個性を主張してきたバルセロナの歴史がそこにあざやかに映し出されていることに気づくのではないか。そう思ったのである。

ゴシック地区

港の後背に広がる二キロ平方たらずの中世以来の旧市街を貫く南国

的な風情の広い並木道が有名なランブラス通りで、名物の、動かない人間彫刻が観光客の眼を惹く。旧市街、とくに西側が小犯罪の多発地帯であるからか、大通りの中央西側にある警察は、市内全域の面倒の引受け先になっている。スリやひったくりに遭ったら最寄りの交番を探すより、ここに駆けつける方が勝負は早い。

ちょうどその反対側、ランブラスの北東、大聖堂やカタルーニャ政庁を中心とする一帯が「残された中世」に当たる部分で、「ゴシック地区」と呼ばれている。貴族や豪商の邸や望楼、「王の広場」をはじめとする、さすがに風格を感じる広場や中庭の連鎖から成る街区は、一応中世へのタイム・スリップの気分を味わわせてくれるだろう。

「一応」と留保した表現になったのは、全体としてのスケールがそれほどでないこと、肝心の大聖堂の正面が十九世紀にフランス風のネオ・ゴシックに改変され、一見壮麗にみえるものの、この国の歴史から断絶した索漠たるものでしかなかったことによる。カタルーニャ・ゴシックはバットレス(支柱)が壁体に取り込まれ、外目にはゴツゴツしてみえるが、内部は三層等高、側廊には礼拝堂を納めて、典型的ゴシックに比べると高さを強調しない、親しみのある、それでいてふしぎに洗練味のある様式なのだが、その全体像はすこし離れたサンタ・マリア・デル・マルにみるほかない。ここは船乗りが金を出し合っつった教会という点でも、バルセロナらしい。

旧市街は城壁に囲まれていたが、十八世紀初めにその外側、大砲の射程距離に当たる二キロにわたって住居建設が禁止された。防衛上無

人地帯が設けられたのである。これが、十九世紀半ばに禁止が解かれるとともに、恰好の計画的都市づくりの舞台となった。

新市街の誕生

バルセロナは織物業を中心に新しい繁栄期を迎えていた。都市づくりの牽引力となったのは開明的な工場主たちと、合議と自治の伝統に誇りをもつ市政当局者たちである。一八六〇年のセルダの拡張計画は、同時期のオスマンのパリ改造計画と並び称された。パリのように壮大なモニュメントから放射状に街路を伸ばす中央集権を象徴するパロック的な演出をねらったものにならなかったのは、反中央、反骨精神に富む土地柄というべきであろう。

それは北米やオランダ、スコットランドに広くみられる格子状プランで、一三〇メートルの正方形ブロックを二〇メートル道路で囲むパターンを基本とし、それによって構成された街区の全体に二本の太い斜線を加えることで、パリやウィーンにも敬意を払った。

格子状プランといっても、角を二〇メートル分ずつ削って八角形ブロックとし、建物（多くは集合住宅）はその二辺のみに貼りつけられ、高さも原則五階に抑えられた。またブロックの残余の二辺は街路に開かれたグリーン・スペースとされた。これは同じグリッド・プランでも、十八世紀のエディンバラのニュータウンやバースに比べると、はるかに進んだ案となり、むしろ四〇年後のハーワードの田園都市構想を先取りする性格さえ含んでいた。

現実には地権者の抵抗などがあって、建物はブロックの四辺（八辺）すべてに貼りつき、高さも七、八階に変更され、ときには中庭もつぶされ、ところによっては道幅も狭められた。その結果、新市街の人口密度はセルダの計画の二五〇人／ヘクタールを大きく上回り、一〇〇〇人／ヘクタールに達した。田園都市とはおよそ遠い整然とした集合住宅中心の都市区画となったのである。これがバルセロナの新市街（「拡張区域」）である。

アール・ヌーヴォーの競演

しかし、この新市街には、その建設の過程でおどろくべき特徴が付け加えられた。街並みをつくる個々の建物が多数の才能ある建築家たちの競作の場となったのである。拡張地区のほとんど全域は一八八〇年から一九二〇年の間につくられたが、その少なからぬ部分が数十名のこれら建築家によってデザインされた。その結果、街の表情にはかみられぬ熱気と華やきが生まれた。それぞれが個性を發揮しながら、全体としては時代の空気と美学——「モデルニスモ」とか「アール・ヌーヴォー」と呼ばれた——を映し出す質の高い建築美を誇る都市を生んだのである。

バルセロナというと、すぐガウディと言われる。

たしかに彼は異能の建築作家で、彼の作品を見るのは衝撃的な体験であろう。彼はバルセロナの市街で六つの館と一つの学校、公園、教会、そして記念碑や街灯をデザインし、さらに近郊でおそらく彼の最

い筆触のフレスコ画の迫力は、あきらかに一流の画工、石工のわざをしのばせるもので、なぜこんな峻険な山中の寒村にこれだけのものが、と人をおどろかせる。

どうやらそれは、スペイン全土を占領し、カタルーニャの平野部をも支配下に収めたイスラム勢力を次第に南へ追い落とし、最後には一四九二年のグラナダ陥落へと導いたキリスト教徒のあの「レ・コンキスタ」（国土回復運動）に当たって、ピレネーの勇猛な山人が貢献したのに対する領主や教会の恩賞や死者への鎮魂の証であったらしい。以来、十九世紀末まで七、八百年にわたって、教会は村人や領主、教会当局によってひっそりと守られてきたのであった。

教会財宝の危機

しかし、次第に教会の維持はむつかしくなってきた。それに拍車をかけたのが一八八八年の万国博である。この博覧会はガウディのパビリオンやモンタネのホテル建設などをつうじて、民族意識をかきたて、「カタルーニャ・ルネッサンス」の導火線となり、新市街の建設を独自の「モデルニスモ」一色に染め上げるのに貢献したのであるが、他方では同じ民族意識の高揚の一環としてカタルーニャ各地の教会の祭壇画や彫刻を多数展示し、同時にフレスコ画も写真アルバムとして公開し、それが大きな評判を呼んだ。それらは博覧会が終わってからも、出品側の意向で教会に返却されず、そのまま保存されて、それが三年後の市立美術館設立をもたらすことになった。教会や村が返却を求め

なかつたことは、彼らがその管理をもてあましていたことを示している。これがカタルーニャ美術館の起源である。

しかし、ピレネーの教会美術が世に知られるようになるにつれて、欧米の収集家がそれに眼をつけるようになった。米西戦争の敗北でスペインが植民地を失い、通貨価値が下落したことも災いした。そうしたなか、アメリカ人収集家の一団がトラン谷の教会壁画を買収し、それをカッターで切り取って持ち出すという事件が起こった（現在ボストン美術館所蔵）。フレスコ画が公然と切り取られたのは、これがはじめてである。

ショックを受けた美術館とカタルーニャ政庁はマドリッドの中央政府とカトリック教会に文化財の買い取り・流出防止措置を講じるよう働きかけた。しかし、二十世紀のスペインは紛争と混乱の連続で、あらゆる権威の低下はおおいがたく、財宝の流出はやまなかつた。もともと中央政府はカタルーニャとそりが合わず、地方文化財の保護には熱意がなく、税関もチェックが甘く、自治政府も山間にまでは眼が届かなかつた。より深刻な脅威は政情の先行き不安で、どんな独裁政権や急進派の政府が次に現れるか、予断を許さなかつた。そうしたなか、貧しい村人や末端聖職者が、金銭的誘惑に耐えて、教会の宝を守りつづけることは容易なことではなかつたのである。

つらい決断

美術館当局は以上の状況からもはややむをえずとつらい決断を下し



カタルーニャ美術館のなか—「もとのままの形状」の展示—

た。すでにみたように、教会のフレスコ画をじっくりカットでめぐりと、それをバルセロナに運んで、もとのままの形状で保存・展示することにしたのである。「もとのままの形状」というのは、丸天井であれば丸天井のまま、窪みに描かれてあれば窪みのまま、その形へ入れればもとの教会の内部に入ったと同じ空間を再現させるのである。つまり、美術館の全体が巨大な鞘堂になり、そのなかに多数の教会の後陣やチャペルのインテリアが立体保存されたのである。

鈴木孝寿『カタルーニャ美術館物語』（筑摩書房）によれば、この過程で美術館長ホアキン・フォルケの果たした役割には特筆すべきものがあつたという。彼は中世美術史の専門家であるだけでなく、民族運動の活動家でもあつて、地元の文化遺産への愛着が深かつた。また芸術家で彼の恩師であり、バルセロナ政界の大立物であり、モデルニスモ建築の全盛期を担った建築家として声名の高いプッチ・イ・カタフェルクは、壁画の剥ぎ取りには強硬な反対の立場を取っていた。文化遺産、とくに建築物はその土地にあつてこそ生きていたのであつて、生まれた地から切り離されれば生命を絶たれるにひとしいと考えていたのである。

そうした彼らが決断し、実行するのではなければ、このように思い切つた手段を取ることはできなかっただろう。プッチはファルクの説得に応じ、そしてこの美術保存史上まれな決定が実行に移された。一九二〇年、まず四つの主な教会から、つづいて五つの教会からフレスコ画が切り取られて美術館に運び込まれ、以後七〇点に及ぶ壁画がピレネーの谷のそれぞれの教会から移されたのである。

美術館の歴史は略奪の歴史という一面を持っている。とくにヨーロッパ先進国の大博物館は、その点では多かれ少なかれ後ろ暗い思いがあるはずだ。なかには、保護や公開の美名のもとに、石仏を岩面から削り取るなど、ときに野蛮な方法で、その土地に属する文化財を奪い取ってきた。カタルーニャ美術館は形のうえで同じことを、しかし、郷土のかけがえない文化を守ろうという切実な動機から行った

のである。

カタルーニャの悲劇

私は何年かまえ、ピレネーの山中に壁画が切り取られたあとの教会を訪ね歩くという旅を試みたことがある。記憶のなかの美術館のフレスコ画とまだ見ぬ教会を重ね合わせてみたいと思ったのである。

切り取られたあとは精巧な模写で埋めるといのが当初の約束だったはずだが、実際に眼にしたのは、どの教会でも、程度の差はあれ、およそオリジナルとは懸け離れた稚拙な代物でしかなかった。予想しないではなかったとはいえ、山々のみどりに映える教会の塔や後陣の美しいシルエットに酔わされたあとでは、落差の感覚は大きかった。教会訪問には外と内と、二度のたのしみが続いているはずなのに、がっかりしたものである。だから、農家の納屋の奥に隠れているような小さな教会に、鍵を借りて入り、傑作とまではいかなくても壁画がそのまま残されていると、それだけでなぜかうれしく、鍵を持ってついてきてくれた子供にお駄賃を渡したときの笑顔にまで、みたまされる思いがあった。しかし、それはもとより感傷というものであって、むしろそうした事態を生んだスペインの不幸、カタルーニャの悲劇を想うべきなのであろう。

とはいえ、バルセロナは今も昔も猥雑なまでのエネルギーにみちた街である。それを知るためには、たとえば「不協和の街区」など新

市街やアール・ヌーヴォー建築群をみて歩いたあと、カタルーニャ音楽堂でドミンゴがカレラスの唱うスペイン歌曲の夕べを楽しんだあと、すぐ近くのやはりモンタネの作「四匹の猫」亭で夕食を取り、百年前にはここでガウディやモンタネ、プッチラのほか、ピカソやカザルスもたむろしていたことを想えばよい。ミロはまだ少年で、ダリはまだ生まれていなかったが、やがてはここに陣取ることになる。ジョージ・オーウェルも内戦のとき共和国軍に参加して、ここを訪れた。それが彼の『カタルーニャ賛歌』になる。ピカソもカザルスも、フランコの軍部独裁政府に抵抗して、終生帰郷しなかったけれど、おしなべてカタルーニャ・ナシヨナリストである彼らの想いやエネルギーは、この街のあちこちに染み着いているといつてよい。ピカソも生前「家族から」として、バルセロナ当時の青少年期の作品を市に寄贈し、それがピカソ美術館となった。カタルーニャの悲劇も、ひとつにはこの、ナシヨナリズムの形をとった制御しがたいエネルギーの産物だったのかも知れない。